

令和7年度 第2回 未来館トークサロン発言内容

開催日：令和7年12月10日（水）13：30～15：00

会 場：福島県男女共生センター 4階 第4研修室

参加者：東 あすか氏（なみえコミュニティシネマ代表）

阿部 成美氏（株式会社陽と人 スタッフ）

竹内 樹美氏（会津美里こらんしょ woman 代表）

引地 知子氏（二本松市東和地区集落支援員）

福島県男女共生センター 館長 千葉 悦子

司 会：福島県男女共生センター 副館長 深谷 一夫

事務局：事業課副課長 岡部 貴敏、主事 浅田 彩葉

【開会】

深谷：ただいまより、未来館トークサロンを開催いたします。本日の進行役を務めます男女共生センター副館長の深谷でございます、どうぞよろしくお願いいたします。

初めに当センター館長千葉悦子からご挨拶と開催趣旨についてご説明いたします。

【館長あいさつ・開催趣旨】

千葉：皆さんこんにちは。お忙しいところお集まりいただきありがとうございます。引地さんは昔からお付き合いがありますけども、ほかの方々はお会いするのが初めてということでどうぞよろしくお願いいたします。

当センターは2001年に開館いたしまして、来年25周年を迎えます。この未来館トークサロンは、開館当初からずっと続けている事業として、館長が地域に出かけて行って県民の方々と直接お話ししながら、地域の課題を共有して、解決のヒントをいただく企画として実施してきました。

ここ数年は「女性の政治参画」をテーマとして、桜の聖母女子短期大学や郡山女子短期大学、今年の6月には東日本国際大学の学生さんと、市や町の女性議員さんをゲストにお迎えして意見交換する場を持ちました。

福島県に限らず、今、全国的に少子高齢化が大変大きな課題です。そして地方に都会の女性をなんとか迎え入れたいと様々な施策が次々と始まってきている状況です。

今回、地域で活動したり、仕事をなさっている女性たちにお集まりいただいて、活動をしている中で良いなと思うこともあるでしょうし、いろんな課題もあるのではないかと思いますので、そのあたりの本音を出していただいて、意見交換できればいいかなと思っています。

今回事業を担当している、センター職員の浅田主事は最近大学を卒業して入ったばかりの若手でございますので彼女の意見も聞きたいと思っています。短い時間ではございますけれども、どうぞよろしくお願いいたします。

深谷：それでは自己紹介に移ります。ここではお名前と所属団体、そして現在取り組んでいる活動について、経緯等も含めて、お一人5分程度でお願いいたします。

では、東さんからお願いいたします。

【自己紹介】

東：こんにちは。「一般社団法人とみおかプラス」職員で、本業とは別にプライベートでやっている任意団体「なみえコミュニティシネマ」の代表を務めています、東あすかです。出身は郡山市で、幼少期からサッカーをしまして、富岡高校がサッカーやゴルフ、バドミントンに力を入れ国際スポーツ科になった年に、親元を離れ寮生活をしながら3年間、富岡町で過ごしてきました。震災当時は20歳で県外の大学に行っていて、郡山市にある実家が全壊し、すぐにでも帰りたかったのですがなかなか帰れませんでした。高校を富岡で過ごしたので復興活動に関わりたかったのですが、なかなか行動に移せなかったという思いがあったことから、2022年に一般社団法人まちづくりなみえに就職し、浪江町に移住しました。まちづくりなみえのコミュニティ再生支援事業では、町内に帰還者が少なく、また、少しずつ移住者が増えている中でどうやって自治回復を目指していくかについて、各区長さんはじめ町民一人ひとりにヒアリングしました。その結果、ごみ拾い活動を再開したいという声を受け、まちづくりなみえとして活動の後方支援をしました。そのような地域活動をサポートする仕事を5年ほどやりました。

私がなみえコミュニティシネマを立ち上げたきっかけは、これまでの活動の参加者が高齢者に偏ってしまったことから、若者から高齢者まで多くの世代がどのようにしてつながってコミュニティを再生していくかを考えまして、このままでは難しいなと感じていました。私は映画が趣味で、でも浪江や周辺地区には映画館がなく、休日に福島市に片道一時間半かけて映画を見に行っていました。映画だと小さい子から高齢者が同じ時間、空間、あと感動を共有できると気づいて、映画によって人が集まってきて、なかなか初対面では交流は難しいですけれども、映画を見た後だったら感想の共有だったり、会話のきっかけにもなるんじゃないかということで、2021年に団体を立ち上げて、野外上映会を中心に毎年イベントを開催してきました。

浪江町内は住んでいる方もまだ少ないですし、空き地もあります。また、請戸港などの素敵な地域資源があっても活用しきれいていません。その場所にスクリーンを立ち上げる野外上映会をすると非日常を体験できると考えました。ただ、野外上映は夕方からの開始になるので、そのあとの感想会の時間を確保することが難しい。そこで、観るだけの野外上映会と、軽食などを用意しながら、食べたり飲んだりしてその感想を共有する室内上映会との2つの軸で活動しています。

映画は勇気をもらせるものなので町民の心の復興にもつながるのではないかと思います。コミュニティシネマは、一緒にやりたいと思う方がたくさん手伝ってくださっているので、ある意味一つの参加型のコミュニティづくりのロールモデルになっていると思います。この活動に関わるメンバーを少しずつ増やしていきたいなと思っています。

深谷：いろいろつなぐ役割を担っているんですね。では阿部さん、お願いします。

阿部：株式会社陽と人(ひとびと)の阿部と申します。私は福島市出身で、大学進学を機に上京し、大学院修了後、食品メーカーの研究開発職としてそのまま東京で就職しました。そのあと転職して事務職や食品関連の仕事など幅広く経験した後、福島に戻ってきました。

もともと、いつかは福島に戻って、福島の美味しい農産物を広める仕事をしたいと思っていたんですけども、東さんと同じで私も大学在学中に震災を経験して、やっぱり必ず福島に戻るぞという気持ちを強くしました。一方で、自分自身のライフイベントや働き方の変化を通じて女性が一人で働き続けるってこんなに難しいんだなっていうのを悔しさや難しさをもって実感してきたこともあり、そんな中で出会ったのが陽と人という会社でした。陽と人は国見町にあり、桃をはじめとする地域資源に新しい価値を加えて届けることを大切にしている会社です。私は「福島と女性」という今回のトークサロンとキーワードが重なると思いますが、フェムケア商品を担当しています。デリケートゾーンケアブランド「明日わたしは柿の木にのぼる」や、医療・介護・睡眠の分野の知見を持っているパラマウントベッドと連携しまして、更年期世代の女性と起業を支える職場支援プログラム「メノリスタ」事業の運営などに関わっています。また、企業の女性社員対象のワークショップや不調を抱える方への個人・個別支援などを行っています。

商品を使ってくださっているお客様アンケートやインタビューを通じて、不調を抱えながらも働き続ける女性の声をたくさん聴いてきました。眠りづらさだったり体の変化や不安だったり、なかなか言えない本音をたくさんいただきましたので商品やサービスを介して、また、企業との橋渡しを通して困っている女性たちの思いに少しでも応えられるような仕事をしていきたいです。

深谷：様々なことを手がけていますね。では続いて竹内さんお願いいたします。

竹内：私は磐梯町出身で本業は建築士です。進学で1回会津を離れて、資格を取ってから福島に戻りたいと思って、10年間関東にいました。20代後半で一級建築士の資格をとって会津に戻ってきて、その後、夫に出会い結婚して会津美里町に移住しました。

会津美里町は「会津本郷焼」が有名な会津本郷町、そして会津高田町と新鶴村の3町村が合併してできた町です。私は旧会津本郷町に住んでいます。ここは会津本郷焼だけが有名だと思っていたんですけど、住んでみると裏路地や水路とか街並みが見事です。この街の景観をもっといろんな人に見てもらいたいとたくさんの人に話をしていたとき、仕事で関りのあった会津美里町観光課の職員さんが町の観光づくりに携わってみませんかと声をかけてくださいました。それが10年位前から続けている会津美里町観光まちづくり推進協議会に所属するきっかけです。

また、町主催の講演会に参加した時の内容が女性目線で町の魅力を発信するテーマでそれが面白いなと思って、私もできることから始めてみようとして「会津美里こらんしょ woman」を2016年に立ち上げました。メンバーの皆さんは主婦の方が多く、町が発信しないような生活者としての目線から、例えば「稲穂が実ってきたよ」とか「ここのお店で新発売のお菓子があるよ」とかそういう小さなことを発信してきたんですけれども、チラシや名刺などを個人のメンバー自身のお金で作るのは違うと思い、その経費を捻出するためにマルシェをはじめたのがきっかけです。

最初は店舗数6、7つの小さいマルシェを私の建築事務所の中でやっていたんですけど、町の職員さんが面白がって手伝ってくれて規模をちょっとずつ大きくしていく中で、さらに町や観光協会の人にも声をかけてもらって、ワインフェスなど色々違ったイベントも手伝って欲しいと声を掛けられ初期スタッフとして参加していました。ほかに町商工会と連携してハロウィンの時に『町を見せる、人を見せる』とのコンセプトで町と店と人をつなぐ「マチミセ」というイベントもやりました。ここ3、4年は、子どもたち向けのハロウィンイベントと、本格的なコスプレイヤーさん向けの「美こ祭」というイベントを同時開催しています。会場は会津ではとても有名な高田町の伊佐須美神社の横町門前町通りで、神社に協力いただいて実施しています。福島市や県外からもコスプレイヤーさんがきてくださって、ハロウィンの子どもたちも仮装をしているので、コスプレイヤーさんたちが町を歩いても浮かなくてすごくいいねと声をかけていただいたりしています。

商店街は車で通っても歩いた事のない人も多く、商店の中に入ったことがない地元の人もいっぱいいます。ハロウィンのお菓子配りのイベントをきっかけに子供たちが「いらったがよー」と言って商店に入りお菓子をもらい、商店のおじちゃんおばちゃんは結構ノリノリで「いだよ〜」とか「もらったがよ〜」なんて返事をしてくれます。

「いらったがよー」は会津弁で「いますか?」の意味で、子どもたちは恥ずかしがってなかなか言えないんですが、それがまた可愛くて、商店街の皆さんも保護者もスタッフも全員ニコニコでその光景を見守っています。会津で大きい店といえばメガドンキホーテなんですけど、ドンキに行かなくても商店街にも面白いものが売っているんだよと知るきっかけになればいいなと思っています。

深谷：地域の賑わいづくりをされているのですね。最後に引地さんお願いいたします。

引地：私は生まれも育ちも二本松市東和地域です。昭和51年に地元の高校を卒業してから東和町役場の職員となり、その後合併した二本松市職員として勤めました。退職後の令和3年度に会計年度任用職員として東和地区の集落支援員になって5年目です。集落支援員になった理由は、東和町役場に入ると同時に地元の青年団に入ったことかなと思います。青年団は年齢も職業も違う人たちの集まりで、一緒に敬老会や木幡の幡まつりの協力をする中で仲間と過したり話したりすることの楽しさ、イベント後の達成感がよくて活動にのめり込みました。6年間続けた青年団を辞めた後もいろんな地域で活動す

るのですが、東和公民館に異動した時にはいろんな講座を企画して、その講座生が中心になって新たな会を立ち上げて私もそれに参加したりして、どんどん活動の場が広がって気づけばライフワークとなっていました。退職してから自分は何ができるかと考えた時に、今まで地域で活動してきたことが活かせるんじゃないかと集落支援員になりました。

集落支援員の仕事は、住み慣れた地域で安心して暮らし続けるための支援や子どもから高齢者までのつながりづくりなど、つながることが助け合いの第一歩、これは私がテーマにしていることです。集落支援員制度は、地域おこし協力隊と同様に総務省がつくった制度で、両者の違いは、地域おこし協力隊は首都圏から人を呼んできていますが集落支援員は地元の事情に詳しい人になって、集落の点検とか集落の在り方についての話し合いなど、集落の維持活性化に向けた取組のサポートをします。二本松市では現在6名おりましてどの地域でもそうだと思うのですが、人口減少、少子高齢化が本当に急激に進んでいます。いかに地区の皆さんがこの現状を自分ごととしてとらえて、自らの集落を自ら考え取り組むことにつなげるかを手探りで模索しています。

ちなみにこの東和地域はこの20年で人口が40%も減っています。共同作業など今までできたことができなくなってきて、高齢化で区長などの役回りもできなくなってきています。行政区そのものも存続できるのか、猿や猪などの獣害、高齢者の免許返納などたくさんの課題があるので、まずは集落の現状を聞き取りする「集落カルテ」事業に取り組んでいます。その他にも、例えば防災教室やごみの分別の講習会、介護の学習会を企画しながら話し合いのきっかけづくりをしているところです。

新年会と総会しかやっていなかったのも、団体長会や地域振興協議会に話し合いの場を作ってほしいと提案したり、「面白いぞ！東和地域、楽しい地域を自分たちで作る座談会」とか「楽しいと思える地域を自分たちで作ろうワークショップ」に取り組みました。最近では「針道地区女性の集い」というおしゃべり会を今年の4月から始めて今月で8回目です。

ほかに、集落支援員になって初めて取り組んだ、小物づくりや読み聞かせ、絵を描いている若い女性たちの声から始めた「とうわつながるマルシェ」は道の駅ふくしま東和で開催して、今年で5年目になるところです。

【テーマ①】

県外や地域外から見て、今の地域や福島はどう見えるか、また、同じ地域でも時間の変化をどう感じるか。

深谷：引地さんはさまざまな地域コミュニティづくりに関わっているんですね。皆さんありがとうございます。それでは意見交換に移ります。3つのテーマに沿って皆さんからお話をいただきたいと思います。

まず1つ目として、県外や地域外から見て、今の地域や福島はどう見えるか、また、同じ地域でも時間の変化をどう感じるかについて、阿部さんからお願いいたします。

阿部：大学、大学院、社会人の初めまで関東にいたというのもあって、その時期に見えていた福島と、戻ってきてから見ている福島との差というのが一番考えやすいのかなと思います。震災で福島の農作物は危険だというイメージが広がってしまったので、大学のサークル活動で検査をして安全な福島県産の農作物を仕入れてPRして販売する活動をしました。その時に本当に大丈夫なのかというお客様の声をたくさんいただくことをすごく覚えています。10年以上経ったいま、会社で国見町の桃などを首都圏へ流通させている中で、お客様からいただく声はその当時とは全然違って、福島の果物が好きなので毎年買わせていただいていますという声や福島の果物を食べてもうこれ以外食べられなくなったので毎年買っていますなどの声が増えています。これは福島県みんなでPRしてきた結果かなと思います。

あとは地域では農家さんを中心に高齢化が進んでいるのは日々痛感しているところです。一回、福島から出て行ってしまうと中々戻ってくるハードルが高いことも周りの近い世代の方々から聞きます。

深谷：次に竹内さんお願いします。

竹内：夫の会社が米屋なので、農家の高齢化が進み、米を作る人がどんどんいなくなっていると実感しています。今年は特に米が高かったので、米離れも怖いかなと思います。会津の米はすごくおいしくて、夫の会社のお米は高島屋さんなど東京のデパートにも置いているんですけど、都内のお客さんがおいしいと直接電話をかけてくださったり、直接お米を買ってくださる方も何人かいて、風評被害も少しずつなくなってきたのかなと感じます。

さっき街並みがすごく好きと言いましたが、昔ながらの建物が壊れてきていてそれがすごく残念で、壊して新しく作っているところもあるんですけど、新しい建物になることで趣のある古い街並みではなくなり、街の景観が変わってしまったと感じます。合併前の会津本郷町では、建物の色合いとか素材とかを揃えたり、景観を保全する条例があったんですけど合併とともになくなってしまっていて、なんとか街並みを保存していく工夫ができないかなと思っているところです。

深谷：県外についてですと、引地さんはお話ししにくいかなとも思いますが、これまでの皆さんのお話も踏まえながらお願いいたします。

引地：東和地域は自然豊かで、東和といえば有機農業だよね、農業に関わりながら仕事をするのもいいよねということで、都会との二地域居住を考えている人も増えていて、お試し移住や農業体験ツアーとかに参加している人が毎年います。移住者が移住者を呼びこむという感じで、新規就農者が60人くらいいるんですよ。

近年のニュースでびっくりしているのが福島県は若い女性の転出率ワースト1位くら

いになっていることで、なんでいつの間にこんなに減っちゃったの？と思ったのですが、NHKの特集番組を見たら女性たちが、地域にはしがらみがあるとか、人の目が気になるとか、親に色々言われるのが嫌というようなことを言っていて、地域では自分が自由にやりたいことができない、自分らしく生きることができない魅力がないところと映っているのかなと思いました。私は、外に出ていくこと自体は仕方がないと思っているので、人生の転機や生きてきて迷ったときの選択肢に地元に戻ることが入っていればいいのかなと思います。そのためには、だいたい中学校までに、地元で楽しい体験をしたり人とのつながりをつくることがとても大事だと思っているので、集落支援員として子どもたちとの関わりを大切にしたいと思っています。

マルシェを通じて若いお母さんたちは、「〇〇ちゃんのお母さん」ではない、自分が好きなことをできる居場所を見つけることができたこと、家族にも遊びと見られていただけ活動がすごく注目を集めてそれで家族が活動を認めてくれたことに繋がっていきしました。自分もやればできるんだ、ほかのことにも挑戦したいと彼女たちは言っていました。「こどもマルシェ」には保護者やおじいちゃん、おばあちゃんも来るし、自然と世代間交流になっていると思います。

深谷：最後に東さんお願いします。

東：県外の大学、大学院を出て福島に戻ってきてからは、福島市、郡山市、いわき市、そして浪江町に住みました。浪江町が郡山市の次に長く住んでいる場所で、浜通り全体でみると、多分震災前は男女の比率って半々だと思うんですけど、いま双葉郡の女性の割合は35%くらいです。私が浪江に住み始めたころは、全人口が1,500人もいなかった時で、道路を歩いている人や走っている車もない状況でした。いまは散歩したり、ランニングしている人がいます。数年前までは子どもが自転車に乗っている姿すらも一度も見ることが無いくらいでしたけど、最近は子どもの数も少しずつ増えて子ども同士で待ち合わせして、電車で遊びに行くなど以前の日常が見えるようになってきたと感じています。

震災前、全県版の新聞に双葉郡が取り上げられることは滅多になくて、でも震災後は被災地ということでもちょっとしたイベントでもすぐに全県版に載ったりするじゃないですか。県外の方はいまも被災地という認識だと思いますけど、県内の人でも被災地のイメージがまだ強くあるのではないかと思います。私は、住民がゼロになった町というキャッチコピーみたいなものを震災から15年経っても見られることにすごく違和感があります。双葉郡にいま住んでいる人たち、私もそうですが、住みたくなかったら住んでないんですよ。みんな希望を持って戻ってきているのに、いまだに住民がゼロになった町みたいな、あえてこう、下げてから上げるみたいに見えてすごく違和感がある。もちろん県外からの人からすれば、未だにかわいそうな町に見えてしまうと思うのですが、私はそこではなくて、いま住んでいる人が楽しいと思っているポジティブな情報を発信したいなとすごいと思っています。コミュニティシネマも、別に復興のためにはやって

いません。だから、基本的に震災をテーマにしたものではなくエンタメ映画を選んでいきます。住んでいる方が震災当時の状況を一番知っているし苦しかったし、それでも前を向いているからこそ、エンタメ映画を楽しむことで一体感が芽生えればいいなと思っています。でもそのバランスの難しさというか、被災地という言葉を使わないとやっぱり人を呼べないのかと活動の中で感じています。例えばコミュニティシネマのイベントの時にマスコミが取材に来てくださるのですが、テーマを復興に関連づけたいんですよね。『東さんは復興のためにこの活動されているんですよね』という既定路線に持っていこうとするんですけど、いや復興のためというより、私は映画が好きで、映画を見たい人が集って楽しめる空間をつくりたいだけですと念を押して言っています。復興のフェーズが変わってきていると思いますが、いかに被災地イメージから脱却するかというところは常に考えています。

また、県内全体でもそうですが、浜通りはさらにジェンダーギャップがあると思っています。女性の人数が少ないし、浪江町議会議員は女性が一人もいないし、あとは浪江町役場で課長クラスの女性管理職が、2年前にやっと一人になったくらいで、その中で女性の声ってどうやって吸い上げてもらえるのかなと感じます。一步一步前進はしていると思うんですけど、郡山とか福島とかの都市部に比べたら男女共同参画がまだまだ進んでいない地域であるとても感じています。

深谷：高齢化の話や女性流出、被災地、ジェンダーギャップなどのワードが出てきました。皆さん、お互いに聞いてみたいことなどありますか？

千葉：東さん、阿部さん、竹内さんは県外に出られましたがいずれは帰りたいと思われた。それは福島愛と言いますか、どういう思いだったのかお聞きしたいです。引地さんも言っていたように出ていく女性も多いわけですよね。出ていく理由もいくつか挙げられていて、例えば、地域特有のしがらみの問題や仕事がないこと、進学先の問題だとか、色々あって出て行ってしまい、一回出て行くと中々戻ってこない中で、皆さんたちの思いを少し教えていただけたら。

深谷：東さんからお願いします。

東：私は震災がきっかけで戻ってきました。もともと教員志望でしたが福島で教員をやりたいかというところまでは決まっていなかったのも、もしかすると首都圏で教員をやっていたかもしれないです。ただ震災があって、家族の命が危険にさらされたし、また、3年間住んでいた富岡町も第二の故郷だと思っていたので、故郷を失う怖さを感じて福島に戻ろうと決めました。

深谷：阿部さんおねがいします。

阿部：私は、純粋に福島が好きという気持ちが強かったです。大学に進学するときに福島を出る寂しさを抱えていたことをすごく覚えていて、友達に自分の地元の話をしたときに、実家の目の前が畑になっていて、近くに田んぼがあることが当たり前で、夕飯の前になると目の前の畑から野菜を取ってきて調理して、が日常にあったことが思い出されて、震災が起きてそれは当たり前ではないということに気づき、そういう自然豊かな場所から離れたくないと思ったのを覚えています。

深谷：竹内さんはいかがでしょう。

竹内：高校卒業後は資格を取るために関東の大学に進学し、そのまま就職して、約10年間福島を離れていたのですが、思えば私も純粋に福島が好きだったのかなと思います。帰省で福島に向かうと那須連峰のあたりからどんどん山が増えるじゃないですか。会津で磐梯山を見て育ったので、磐梯山を何か月かぶりに見ると涙がにじんでくるというか、山の風景がすごく懐かしいというか、こういう自然豊かな場所で暮らしたいなと思いました。

また、関東で一人暮らしをして働いていた時に祖母が亡くなったんですけど、その時は車もなかったので、危篤の時に駆けつけられなかったのが今でも残念な出来事で家族のそばにいたいなと思いました。いまは実家から一時間もかからないところに住んでいて、そんな頻繁に会いに行くこともないんですけど、なんかあったときに近くにいて頼ったり頼られたりしたいと思いました。そんな感じで20代後半で会津に帰ってきました。

千葉：引地さんは出たいとは思わなかったんですか？

引地：実は悩んでいたんですよ。でも役場に就職したことが大きいと思いますし、高校卒業して10年くらいの間にいろんな活動をして仲間と楽しくやっているうちに「ああここでもいいかな」そして「ここがいいかな」と思えるようになりました。

千葉：浅田さんは？

浅田：私はずっと二本松市に住んでいて、大学も郡山です。私はもともと芸術系を専攻したいと考えていたのですが、浜・中・会津でそれぞれ地元の人たちが作り上げてきた文化があってそこが面白いなと思ったのと、でもそれを地元の人知らないというのを感じていました。大学生の時に自分の地元のことを語る授業があって、本宮市に住んでいた友達に二本松少年隊と玉羊羹のことを話したんですけど知らないと言われてしまって。隣の市なのに知らないのかと驚いたこと、自分自身まだまだ福島に住んでいて知らないことがあるのに、県外に行っているのかなと考えました。

また、小・中学校で家に帰ってきたときに、近所の方におかえりと言ってもらえるの

がすごく好きで、地域の人に育ててもらったという思いがあったことから、地元で就職を探しました。

今は、このセンターで男女共同参画を推進する仕事をしているので、特に地元の皆さんが自分らしく過ごしてもらえるように日々の仕事をしているところです。

【テーマ②】

地域活動をする上で、女性であることで困った点や良かった点

深谷：皆さんの思いがよくわかりました。2つ目のテーマ「地域活動をする上で、女性であることで困った点や良かった点について」です。また順番にお話ししたいと思っています。次は竹内さんからお願いします。

竹内：良かった点は、いま「マチミセ」というマルシェを大々的にやっているんですけど、女性が主催しているということで目立ちやすいというか、会津美里町で「こらんしょ」というと大体私たちのことだとわかってくださるので、話が通りやすいというのがあります。あと、テーブルやテントを運んだり力仕事するとき、役場の方とかが手伝ってくださるのはありがたいなと思います。困った点でいうと、私も経験したことはあるんですけど昔は特にセクハラが多くて、そうなる関係性を断ち切らなきゃいけないのがすごく残念だなと思います。私の仕事の建築も男性社会なので、自己防衛として女性が少ない飲み会には行かないとか、思わせぶりの態度は取らないとか、仕事やマルシェのときに気まづくならないように気をつけています。

現在、本郷の小学校と中学校が合併していて本郷学園になり、中学校の校舎に小学生が通うようになりました。私は、旧小学校跡地をどうするかを協議する委員会にも参加しています。この話し合いの場である町民懇談会を開く時間が平日の夜なんです。先日も木曜日の18時30分から20時30分で、その時間だと子育てしている女性は参加できなくて参加率が悪いんです。周りを見ると男性ばかりで、それも大体子育てが終わったご年配の方たちがいっぱい、結局、参加した女性は私一人でした。

町は現小学校の校庭にこども園を作る計画を立てていますが、そうすると小学生は中学生と一緒に中学校側のグラウンドを使うことになります。小1と中3が同じところにいるのはとても危ないです。私は、自分の子どもがこの学校に通っていることもあり、旧小学校跡地には子育て支援センターや公園とかを作ればいいと話し合いの場で伝えています。また、町の人に声を届けてほしいと言われて委員会に参加しました。

子育て世代の声が届かない懇談会ではなく小・中学校、幼稚園、保育園の親御さんにGoogleアンケートでもLINEアンケートでもいいし、小学校のPTA総会などの機会に子育て世代や若い人たちの意見や声を聞いていただきたいとお願いしているんですけど、子育てが終わったご年配の方たちの意見だけで決まるようなことがすごく残念です。

私は、議長と教育長、町長にも会って意見を伝えました。そんな子育て世代の人たちが参加できない時間開催する懇談会でいいんですかと言ってもなかなか覆らなかった

のですが、その後の懇談会に9人の議員さんが来てくださって、あらためて町民の皆さんの声を聞いていただくこととなり、議会で再度検討してくださることになりました。

深谷：引地さん、困った点を中心でも構いませんのでお願いします。

引地：私はやりたいことをやっているのですが、困ったことはそんなにないのですが、周りを見ているとまだまだ家庭での性別役割分担意識があって、女性の立場は弱く、家事育児介護は女性がやるべきもので、我慢せざるを得ない状況にあるのかなと思います。

今年の4月から針道地区女性のおしゃべり会を立ち上げたという話をしましたが、最初に集まったときに60歳の自営業の女性から、今までは家のことだけだったけど、子育ても終わったから外に出てみたいとおっしゃって、え？それを思うのが今なの、それまで全然思わなかったのかな？って。そうしたらほかの自営業の若い女性も同じことをおっしゃいました。私は今まで公民館に足を運ぶ女性との交流が多かったので、公民館で会えた女性たちは外に出られた方で、まだまだ外に出たくても出られなかった女性たちがいっぱいいるんだなって。私は福島県国際女性教育振興会にも所属してまして、令和5年に「女性が抱える課題に対する意識調査」をしたときに、アンケートの自由記述で「家庭内でジェンダー平等ができていないので、子どもの将来の考え方に影響を与えよう」と書いている人がいて、そうだよねと印象に残りました。

深谷：家庭内でジェンダー平等ができていないとのお話ですね。引き続き、東さんお願いします。

東：地域活動を行う中で女性であることで困った点は、私の団体では女性のコアメンバーが少ないことでしょうか。実は私、いま妊娠中でして、本来であれば団体設立から5年目の節目の年なので、野外上映会とかイベントをそれこそ年4回くらいやりたいと思っていたのですが、結局代表の自分が妊娠してしまったので、つわりもあつたりで、活動を休止せざるを得なくなってしまいました。コアメンバーが確立されていれば、代表が動けなくても代わりに活動を継続することができたんですけど、野外イベントの準備とか運営となると今年は厳しいなと思って、室内上映会はやる方向ではあるんですけど。男性ではこういう出産で活動休止しなければならないことはないと思うので、仕事やキャリアを止めなきゃいけない。妊娠や出産は喜ばしいことの一方で、ライフワークを続けられないもどかしさがあります。

深谷：続けて阿部さんお願いします。

阿部：当社の代表は女性ですし、メンバーもかなり女性が多いので、女性だからといって困ったことはないかなと思ったんですけども、今、竹内さんの話を聞いて、自分自身が生活していく中で感じたことがあります。一つは前の職場のことなんですけれども、

契約社員が多い職場でしたが、同期入社の男性と女性がいたとして、女性にはお茶くみを割り振られるけど、男性には割り振られず、なぜ女性だけが押し付けられてしまうのかと思いました。あとは今、小学1年生になった娘がいるんですけど、私と2人暮らしで、娘は地域のお祭りの太鼓の練習をしています。太鼓を披露する会があるんですが、男性はみんなお酒を飲み交わして談笑している中で、女性は台所に入って男性に出すおつまみや飲みものを準備したり、裏方に徹している場面を目にしました。その男性ばかりの談笑の場で来年度の太鼓の練習はどうするなどの話もされていたので、今後の方針に女性の意見が全く取り入れられないで進められています。ほかに、男性に家庭分の法被が配られても私の家庭の分はなかったり、決まった情報を教えてもらえなかったりもしました。女性は陰で見守るのが役割みたいな考えが身近な地域に色濃く残っているのを最近目の当たりにしてすごくショックで、すごく心の中でモヤモヤしているところでした。

深谷：ほかに何か皆さんの話を聞いてほかにございますか。

東：私も2つくらいあって、本業のまちづくり会社で、富岡町の方と打ち合わせをすることが多いんですけど、ちょうどつわりがひどい時で、リモートワークでオンライン参加した時、ちょうど夕方頃に終わりに「東さん夕飯の支度されるんですか」と言われたんですよ。どうして夕飯の準備をするのが女性が前提で私に言ってくるのかなって。実はうちは夫の方が食事を9割くらい作っているんですよ。男性に夕飯の仕度をしますかなんて聞かないと思うんです。「いや、私はやりません」とハッキリ言いましたが、性別役割分担の固定観念がすごくあるなと思いました。あと一つは、夫と1年くらい別居婚をしていて、福島市に住んでいた夫が、私がいる浪江町に2年前に合流しました。私が前から住んでいるし、わざわざ男性を世帯主にするメリットを感じないので、世帯主は私にしたんですよ。それを夫が役場に手続きに行ったら、「なんで奥さんが世帯主なんですか？いいんですかそれで。」としつこく言われたみたいで。困った夫は「いやすでに妻が世帯主だからそのままでいいですよ。」と言っても「え？なんで変えないんですか。世帯主変更しないんですか。」としつこく言われたようです。なんかおかしい話ですよ。家庭によって事情はあるし、男性だから世帯主にならないといけないことないので、そこは行政もちょっとマインドを変えていただきたいと思います。

千葉：それは行政がちょっとというかかなり問題ですね。私もずっと事実婚でやってきたんですよ。大学を退職したときの頃、友人から「もういいんじゃないの、ここまで頑張ったんだから、名前のことにこだわる必要ないんだから、彼の籍にいっしょになったら？」と強く説得されました。私は「嫌です。自分の名前がいいんだ。」みたいなことを言ったんですけど、そういうマインドがまだまだありますね。その友人は行政に関わっている方だったんですけどね。

【テーマ③】

福島県で女性が自分らしく活動できる環境・場所になるためにはどうすればよいか

深谷：3つ目のテーマに移りたいと思います。「福島県で女性が自分らしく活動できる環境・場所になるためにはどうすればよいか」について、引地さんからお願いいたします。

引地：私が一番思うのは、自分の思っていることや意見を出し合える場を作ることが必要だということです。公民館の学習会でも趣味の会でもいいですが、自然と横のつながりや仲間ができ、交流して学びあうことで、またそこから気の合った人と新たなことを始めることにつながるかもしれない。それが自分らしく生きることの第一歩じゃないかなと思います。男女共同参画社会の実現についても、女性の政治参画者を増やすことも急務だと思うし、政治参画も経済参画への道も、まず学びがあって、ジェンダーバイアスに気づいて、意識改革が生まれることで社会が醸成されていくというふうに思っています。

深谷：東さんお願いします。

東：私も、引地さんが言っていたとおりで、お子さんがいるとかいないとか仕事をしているしていないに関わらず、まずは集まる場所を作っていく。やっぱり女性から声を上げていかないと。困っていることなどを今日のような場で、出し合うだけでも連帯が生まれて、何か始まるきっかけになるかもしれないと考えています。

実は今回このテーマで呼んでいただいて本当にうれしかったんです。もう少し女性にスポットを当てた企画をやりたいと思っていました。双葉郡内は男性住民の方が多いですし、いわゆる男性社会なので、どうしても女性が埋没したり、多分女性も気をつかって一步引いているのが現状かなと感じます。上映会でも、女性をエンパワーメントする作品を上映して、その後に女性たちと情報交換するみたいなことを来月と再来月に企画していたので、違和感を自分の中で抱えるんじゃなくて自分から発信して、つながっていくことが重要になってくると思っています。

深谷：阿部さんお願いします。

阿部：私は働く環境という視点で見ると、女性のライフステージにおいて、される方もされない方もいますけど妊娠や出産、そのほか更年期などの身体や心の変化があります。それを個人の問題として捉えるのではなく、それを会社や組織としてどう支え合っていくかが必要なのかなと思っています。陽と人では、働き方がフルフレックス制度になっているので、働く時間も場所も自分で選択することができるようになっています。実は、私が子どもがいる初めての社員で、どういう働き方だったら続けられるかを社長から何度もヒアリングしてもらって、その結果フルフレックス制度を導入してくださった経緯があります。働く時間についても毎年度面談して、子どもの成長に合わせて、どういっ

た働き方がいいか柔軟に対応してもらっている、いますごく負担なくやりたいことがやれていると感じます。そんな形の会社が増えていくといいなと思っています。

あと、引地さんと東さんもおっしゃっていたように、やっぱり女性たちが自分の言いたい意見を言えるような場がすごく大事だなと思っています。ロールモデルが身近にすることで、自分もこういう活動をしていいんだと勇気をもらえenと思います。今日は貴重な場で、私自身も勇気がもらえたので、こういった場が少しでも増えたらいいと思います。

深谷：竹内さんお願いします。

竹内：福島は田舎だから特に、女性だから家事や育児をするのが当たり前という意識が都会よりも強いとは思いますが、私は本業の建築の仕事をしながらマチミセやマルシェをやったりしていますが、夫より得意だから家事や育児をしていて、そんなに負担だとは思ってはいないんですけど、皆さんの話を聞いて、自分も意識を変えていかないとと思いました。政治や経済などの仕事面も女だからって一步下がらずに、自分ももっと出ていく意識が必要なんじゃないかなと思いました。

さきほど皆さんもおっしゃっていたように、集まる場とか声を上げる場を作っていくのが大事なんだと思いました。こらんしょの活動で、お茶会などをしていた時もあったので、話す場づくりをもう一回企画してみようかなと思いました。

深谷：ありがとうございました。ここで、まとめということで皆さんから一言、感想をいただいて、最後に館長から一言お話しさせていただきたいと思います。東さんからお願いいたします。

東：今日はこのような貴重な機会をいただきましてありがとうございます。浪江でも「浪女」というグループLINEがありますが、おしゃべりで終わらない、抱えているものを情報交換するような場づくりが大事なんだと感じました。共生センターでも講演や研修などのイベントを継続されていくと思いますので、自分も参加したりして、積み重ねていけたらと思いましたので、引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

阿部：本日はありがとうございました。今日皆さんと話し合ったことって、福島県に限らずいろんな地域の方が感じていらっしゃる悩みなんだろうなと思うと、県外の方と一緒に話したりするのも、それぞれの地域の良さだったり困った点だったり持ち寄れそうだと楽しそうだなと思いました。やっぱり女性だからという理由で困ることもたくさんある一方で、いい点もたくさんあると思いますし、活動している方々となつなっていくということは何より楽しいなとあらためて感じたので、また、機会があったらお話しできると嬉しいです。ありがとうございました。

竹内：皆さんの話を聞いて刺激を受けたし、自分の活動のヒントになるようなことも聞きました。東さんの映画上映会は空き地を使った点でマチミセも同じような形でマルシェをやっているので、映画や映像を活用する視点なども取り入れたりできないかなって思いました。会津で中々このように集まる場もないし、活動をされている皆さんの話を聞く事ができて有意義な時間となりました。皆さんありがとうございました。

引地：とうわつながるマルシェは、小さいお子さんがいるお母さんたちの集まりで、打ち合わせ中は子ども同士で別の部屋に集まって遊んだりしています。この前、田村市に勉強会に行ったとき、30代の子育て中の女性議員さんが言ってたんですけど、子育て中の女性がしてほしいこと訴えてきましたが、60代の女性議員の人たちには分かってもらえなかったそうです。当事者の声は大事で、また、それをどう拾い上げていくかも大事だと思いました。

そういえば、針道地区女性のおしゃべり会を立ち上げたと言いましたが職種も違う若い方から60代の女性何人かに声をかけたんですけど、若い女性から、学校の保護者会ですごく楽しくやっているので50・60代の方とは一緒にやりたくないと言われたこともあって、中々世代間で話し合いの場を作るのって難しいと思ったこともありました。今日参加してとてもよかったです、ありがとうございました。

千葉：浅田主事と岡部副課長からも感想をお願いします。

浅田：私はセンターで事業の企画運営に携わってしまして、地域や組織などの女性リーダーづくりにつながる事業も担当しています。日々、どういう事業内容にしたら皆さんの活動に役立てられるようになるか考えながら情報収集などを行っています。皆さんから、女性の意見が言える場があると良いとお聞きできましたし、私自身すごく勉強になるお話がいっぱいありました。今後もどうぞよろしく願いいたします。ありがとうございました。

岡部：今日は皆さんどうもありがとうございました。センターのこれからの事業の参考になるお話をいただけたと思いますので、今日参加できなかったセンター職員や県共生社会・女性活躍推進課の皆さんにも本日の記録を共有させていただければと思います。今後とも皆さんとつながっていきたいと思いますので、引き続きどうぞよろしく願いいたします。

深谷：では最後のまとめを館長からお願いします。

千葉：女性活躍の場面で、輝くやキラキラなんて言葉は使いたくないんですが、皆さんのように一人ひとり、力を持って活動している方がおられることを本当に肌身に感じました。一度県外に出られた方が戻ってこられたように、同じように戻りたいと思う女性た

ちがきっとたくさんおられるんだろなと思います。引地さんがおっしゃったように、福島愛を子どもの頃から育てていくことが大事なんだろうなと思いつつ、センターとして何ができるか考えながら聞かせていただきました。センターのこれまでの25年では、最初の10年は講演会やシンポジウムなど大々的にしてきて、私が館長になってからここ10～15年は、地域の女性たちをつないでいたり、サポートやエンパワーメントしたりする事業にシフトしてきましたけれども、今日皆さんのお話を聞きながら私たちのやってきた方向性は確かだったなということと、もっと広げていかなきゃいけないなと感じたところです。一時間半と短い時間ではありましたが、これからのセンター事業のヒントをいただけたのではないかなと思いました。

また、他方では地域におけるジェンダーバイアスはまだまだ根強くあるということで、皆さんとつながりながら少しずつでも男女共同参画社会の推進を前に進めていきたいと思っています。お一人で頑張っている方もいるし、仲間づくりで頑張ってもらっている方もいると思います。私は、特に仲間は宝だと思っています。ぜひ皆さん地域の中、あるいは地域を超えて仲間づくりのネットワークを広げていただきたいと思いますし、そういうときセンターが力になりたいと思います。これを一つの縁にして、また皆さんと顔を合わせる関係づくりになればいいなと思います。今日は本当にありがとうございました。今後ともどうぞよろしくお願いします。

深谷：以上をもちまして、未来館トークサロンを終了いたします。ご参加いただきました皆さん、ありがとうございました。